Encounter with

Stradivari

Supported by
日本財団
THE NIPPON FOUNDATION

Encounter with

Stradivari

ストラディヴァリウス・コンサート

2022

日本音楽財団
NIPPON MUSIC FOUNDATION

SUNTORY HALL

ARTS FOR EVERYONE
公益財団法人
鳥取県文化振興財団

Izumi Hall

東京公演
2022年10月7日(金) 開演19:00 プログラムA
8日(土) 開演14:00 プログラムB
サントリーホール ブルーローズ

主　　催　日本音楽財団、サントリー芸術財団サントリーホール
助　　成　日本財団

鳥取公演
2022年10月10日(月・祝) 開演14:00 プログラムA
倉吉未来中心 大ホール

主　　催　日本音楽財団、鳥取県文化振興財団
助　　成　日本財団
特別後援　新日本海新聞社、日本海テレビ
後　　援　鳥取県、倉吉市、三朝町、湯梨浜町、北栄町、琴浦町
鳥取県教育委員会、倉吉市教育委員会、三朝町教育委員会
湯梨浜町教育委員会、北栄町教育委員会、琴浦町教育委員会

大阪公演
2022年10月12日(水) 開演19:00 プログラムA
住友生命いずみホール

主　　催　日本音楽財団、
住友生命いずみホール[一般財団法人住友生命福祉文化財団]
助　　成　日本財団

東京、鳥取、大阪公演のチケット売上金の全ては、それぞれ、公益財団法人サントリー芸術財団サントリーホール(東京公演)、公益財団法人鳥取県文化振興財団(鳥取公演)、一般財団法人住友生命福祉文化財団(大阪公演)の行う公益事業に使われます。

All ticket sales of Tokyo, Tottori and Osaka concerts will be each used for public interest projects conducted by the Suntory Foundation for the Arts (Tokyo concert), the Tottori Culture and Arts Foundation (Tottori concert), and the Sumitomo Life Welfare and Culture Foundation (Osaka concert).

PROGRAM *A*

東京(10/7)・鳥取・大阪

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン
弦楽四重奏曲第67番 ニ長調 作品64-5「ひばり」
Franz Joseph Haydn (1732-1809)
String Quartet No.67 in D major, Op. 64, No. 5, "The Lark"
Ⅰ. Allegro moderato　Ⅱ. Adagio. Cantabile
Ⅲ. Menuetto. Allegretto – Trio　Ⅳ. Finale. Vivace

ドミートリ・ショスタコーヴィチ
弦楽四重奏曲第8番 ハ短調 作品110
Dmitri Shostakovich (1906-1975)
String Quartet No. 8 in C minor, Op. 110
Ⅰ. Largo　Ⅱ. Allegro molto　Ⅲ. Allegretto
Ⅳ. Largo　Ⅴ. Largo

休　憩　Intermission

フランツ・シューベルト
弦楽四重奏曲第14番 ニ短調 D 810「死と乙女」
Franz Schubert (1797-1828)
String Quartet No. 14 in D minor, D 810, "Death and the Maiden"
Ⅰ. Allegro　Ⅱ. Andante con moto
Ⅲ. Scherzo. Allegro molto　Ⅳ. Presto

～曲目解説～

ハイドン：弦楽四重奏曲第67番 ニ長調 作品64-5「ひばり」

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）は、モーツァルトやベートーヴェンと共に「ウィーン古典派」と称される18世紀の作曲家です。ハイドンの時代は、およそ一世代ほど若いモーツァルトやベートーヴェンの時代とは異なり、貴族の持つ社会的権力はまだ強く、彼は30年近くもエステルハージ侯爵家の宮廷楽長として仕事をしていました。安定した収入と手勢の楽団を得て、ハイドンは数多くの交響曲や弦楽四重奏曲を作曲し、器楽曲の発展に大きく貢献しました。

「ひばり」という愛称で親しまれているこの弦楽四重奏曲は、エステルハージ侯爵家の宮廷ヴァイオリニスト、ヨハン・トストからの依頼を受けて作曲されたものです。とはいえ書かれたのは1790年、ハイドンがエステルハージ家での仕事を退職し、ウィーンに居を構えた年でした。いわば58歳にしてフリーランス音楽家という新しいライフステージに立ち、キャリアの転換期に書かれた本作は、招聘の声が掛かっていたロンドンの聴衆を意識して書かれたとも考えられています。4つの楽章で構成されている本作ですが、第1楽章の冒頭の主題がひばりの鳴き声を連想させるために、「ひばり」と呼ばれるようになりました。

ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲第8番 ハ短調 作品110

旧ソビエト連邦時代の作曲家ドミートリ・ショスタコーヴィチ（1906～1975）は15曲の弦楽四重奏曲を残しており、第8番は最もよく知られた作品です。1960年7月、ソ連・東ドイツ合作映画の音楽を担当することとなったショスタコーヴィチが、映画の物語に感銘を受けてわずか3日間で書き上げたもので、「ファシズムと戦争の犠牲者の思い出に」捧げられています。

ただしそれは表向きの説明であり、実は作曲者自身の個人的な思いも込められた、自伝的な内容の作品であると考えられています。ショスタコーヴィチはスターリン率いる共産党独裁政権のもと、自由な芸術表現が許されない抑圧下を生き抜いてきました。すでにスターリンの死後7年が経っていましたが、前年には共産党入党を余儀なくされるなど、圧政に対するショスタコーヴィチの苦しみは和らいでいませんでした。映画の「戦争の犠牲者」と自己とを重ね合わせ、切れ目なく演奏される5つの楽章にその思いを込めています。冒頭で作曲者の名前の頭文字D-S-C-Hに由来する主題（レ-ミ♭-ド-シ）が、チェロが悲痛な音色で提示されます。その後もショスタコーヴィチ自身の交響曲、歌劇、ピアノ三重奏曲、映画音楽、チェロ協奏曲などのモチーフが次々と引用されながら、時に激しく、時に叙情的に展開していきます。

シューベルト：弦楽四重奏曲第14番 ニ短調 D 810「死と乙女」

1824年に作曲されたこの弦楽四重奏曲の「死と乙女」というタイトルは、シューベルトが7年前に作曲した歌曲《死と乙女》のメランコリックなメロディーが第2楽章の主題として用いられていることに由来しています。

4つの楽章すべてが短調で書かれ、全体に陰鬱で悲劇的な雰囲気を宿した本作は、シューベルトらしいリリカルな旋律で彩られています。発表当初はベートーヴェンの親友であり優れたヴァイオリニストだったイグナーツ・シュパンツィヒ（1776～1830）から「取るに足らない曲だ。君はリート（歌曲）に専念したまえ」と厳しい言葉が寄せられたと言います。ベテランのシュパンツィヒにそう言われたシューベルトは、落ち込んでパート譜をしまい込んでしまったそうですが、当時はそれだけ斬新な響きに満ちていたのかもしれません。現在では室内楽の最高傑作の一つに数えられていることは言うまでもありません。

解説：飯田有抄（クラシック音楽ファシリテーター）

PROGRAM *B*

東京（10/8）

アントン・ウェーベルン
弦楽四重奏のための緩徐楽章
Anton Webern (1883-1945)
Langsamer Satz

フェリックス・メンデルスゾーン
弦楽四重奏曲第4番 ホ短調 作品44-2
Felix Mendelssohn (1809-1847)
String Quartet No. 4 in E minor, Op. 44, No. 2
Ⅰ. Allegro assai appassionato　Ⅱ. Scherzo. Allegro di molto
Ⅲ. Andante – attaca　Ⅳ. Presto agitato

休　憩　Intermission

ジャコモ・プッチーニ
弦楽四重奏曲 嬰ハ短調「菊」
Giacomo Puccini (1858-1924)
String Quartet in C-sharp minor, "Crisantemi"

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン
弦楽四重奏曲第6番 変ロ長調 作品18-6
Ludwig van Beethoven (1770-1827)
String Quartet No. 6 in B-flat major, Op. 18, No. 6
Ⅰ. Allegro con brio　Ⅱ. Adagio ma non troppo　Ⅲ. Scherzo: Allegro
Ⅳ. La Malinconia: Adagio – Allegretto quasi Allegro

～曲目解説～

ウェーベルン：弦楽四重奏のための緩徐楽章

アントン・ウェーベルン（1883～1945）は、ウィーンを拠点に活躍したシェーンベルク、ベルクと並び、「新ウィーン楽派」と称される作曲家の一人です。新ウィーン楽派というと、20世紀の前半に書かれた無調や十二音技法を用いた"現代音楽"のイメージが強いかもしれませんが、彼らも後期ロマン派の音楽の影響下から出発し、調性による抒情性に溢れた作品も残しています。ウェーベルンの《緩徐楽章》もその一つです。流麗なメロディーと豊かなハーモニーに彩られ、ブラームスの影響が感じられるロマンティックな作品です。

ウェーベルンは1904年からシェーンベルクのもとで作曲を学びはじめ、本格的な活動を始めたのはオーケストラ作品の《パッサカリア》op.1を発表した1908年からです。この《緩徐楽章》は1905年に書かれたものですから、ごく初期の作品ということになります。のちに妻となる従妹のヴィルヘルミーネと共に、ウィーン郊外の山々で過ごした休日の思い出からインスピレーションを得て作曲されました。

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲第4番 ホ短調 作品44-2

裕福な家庭に育ち、幼少期より音楽の才能を開花させたフェリックス・メンデルスゾーン（1809～1847）。彼が初めて弦楽四重奏のための音楽《12のフーガ》を書いたのはまだ12歳の頃でした。その後は作品番号を持たないものを含めて7作の弦楽四重奏曲を残しています。それぞれの番号は作曲順と一致していませんが、第4番ホ短調は4番目に書かれた弦楽四重奏曲で、1837年（28歳）の所産です。ホ短調といえば、後年作曲される不朽の名作《ヴァイオリン協奏曲》と同じ調性です。どこか共通する世界観を感じさせるロマンティックな第1楽章、スタッカートの軽快な主題が印象的な第2楽章、穏やかで歌心に富む第3楽章、緊張感を伴うドラマティックな第4楽章で構成されています。

プッチーニ：弦楽四重奏曲 嬰ハ短調「菊」

ジャコモ・プッチーニ（1858～1924）は、言わずと知れたイタリア・オペラの大家です。《ラ・ボエーム》《蝶々夫人》《トゥーランドット》といった数々のオペラはあまりに有名ですが、実はわずかながら器楽作品も残しています。弦楽四重奏のための作品は4曲あり、《菊》はその一つです。1890年、元スペイン国王でプッチーニのパトロンでもあったアオスタ公アメーデオ1世が急逝した知らせを受けて、プッチーニはこの曲を一晩で書き上げたと言われています。7分ほどの短い作品ですが、大切な友人を失った悲しみを切々と歌い語るような音楽です。なお、この時期にプッチーニはオペラ《マノン・レスコー》を書き始めており、3年後に完成したこのオペラの最終幕で歌われる二重唱には、《菊》のメロディーが使われています。

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第6番 変ロ長調 作品18-6

9つの交響曲や32のピアノソナタなど、音楽史に燦然と輝く傑作を残したルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770～1827）ですが、彼がもっとも崇高な音楽形態として重視していたのが弦楽四重奏というジャンルです。弦楽四重奏は、軽やかで楽しいサロン音楽的な「ディヴェルティメント」から発展し、ハイドンやモーツァルトの時代には芸術性の高いジャンルとして認められるようになっていました。ベートーヴェンは先人たちの楽譜を写譜しながらその音楽語法をじっくりと研究し、30歳を迎える頃に満を持して最初の6つのセット、作品18を完成させました。その最後を飾るのがこの第6番変ロ長調です。

1800年の夏、この第6番を書いていた頃、ベートーヴェンは友人のヴァイオリニストに、「ようやく正しい四重奏の書き方を習得し、満足のいく作品が書けた」と手紙で伝えています。第1楽章は溌剌とした曲想の中で、強弱や長調短調のコントラストを鮮やかに利かせながら進みます。穏やかな緩徐楽章の第2楽章は、中間部で変ホ短調となり、内省的な陰りを見せます。第3楽章の明るくユーモラスなスケルツォを経て、第4楽章は「ラ・マリンコーニア（憂鬱）」と題された長い序奏で始まります。この部分にベートーヴェンは「できるだけ繊細な感覚で演奏せよ」と指示を記しています。主部に入ると雰囲気は一転して朗らかで明るいロンド形式となります。途中で再び「ラ・マリンコーニア」の静謐な旋律が回帰しますが、再び晴朗なロンド主題が現れ、急速なパッセージで華やかに作品を締めくくります。

解説：飯田有抄（クラシック音楽ファシリテーター）

ストラディヴァリウス「パガニーニ・クァルテット」

Stradivarius “Paganini Quartet”

1680年製ヴァイオリン「パガニーニ」
1680 Violin “Paganini”

1727年製ヴァイオリン「パガニーニ」
1727 Violin “Paganini”

1731年製ヴィオラ「パガニーニ」
1731 Viola “Paganini”

1736年製チェロ「パガニーニ」
1736 Cello “Paganini”

アントニオ・ストラディヴァリ（1644～1737）製作による楽器で構成されたクァルテットは、6 セットの存在が知られている。このクァルテットはそのひとつであり、19 世紀の伝説的なヴァイオリニストで作曲家のニコロ・パガニーニ（1782～1840）が所有していたことで有名である。日本音楽財団は1994 年にアメリカ・ワシントンD.C. のコーコラン美術館よりこのセットを購入した。同美術館にこのクァルテットを寄贈した米国のアンナ・E・クラーク夫人の意志を受け継ぎ、当財団は4 挺を常にセットとして四重奏団に貸与している。

This is one of only six remaining sets of quartets compiled with Antonio Stradivari’s (1644-1737) instruments known to exist today. All the instruments of this quartet were once owned by the legendary violinist Niccolò Paganini (1782-1840) during the 19th century. Nippon Music Foundation acquired this quartet from the Corcoran Gallery of Arts in Washington, D.C. in 1994 and loans them as a set succeeding the will of Madam Anna E. Clark who donated the quartet to the Corcoran Gallery.

日本音楽財団webサイト

ゴルトムント・クァルテット　ストラディヴァリウス「パガニーニ・クァルテット」

フロリアン・シェッツ	（第1ヴァイオリン）	1727年製ヴァイオリン「パガニーニ」
ピンカス・アット	（第2ヴァイオリン）	1680年製ヴァイオリン「パガニーニ」
クリストフ・ヴァンドーリ	（ヴィオラ）	1731年製ヴィオラ「パガニーニ」
ラファエル・パラトーレ	（チェロ）	1736年製チェロ「パガニーニ」

2010年に結成。ソフィア王妃高等音楽院にてアルバン・ベルク四重奏団のギュンター・ピヒラー、ベルリンにてアルテミス・クァルテットに師事。ハーゲン、ボロディン、ベルチャ、イザイ、ケルビーニ等の四重奏団のマスタークラスでも研鑽を積んだ。2018年ウィグモアホール国際弦楽四重奏コンクール第2位、同年メルボルン国際室内楽コンクールで優勝を飾った他、新進気鋭の音楽家に贈られるヨーロッパ・コンサートホール協会（ECHO）の2019/20年ライジング・スター、ドイツのユルゲン・ポント財団から2020年の奨励金受賞者に選ばれた。これまでに、ラインガウ、エクサン・プロヴァンス、グラナダ等ヨーロッパ各地の音楽祭や、グラーツ楽友協会、ピエール・ブーレーズ・ザール、エルプフィルハーモニー・ハンブルク、KKLルツェルン等著名なホールで演奏している。2016年、ナクソスよりハイドンの弦楽四重奏曲を収録したデビューアルバムを発売し、BBC、ストラド紙、グラモフォン・マガジン、アメリカン・レコード・ガイド、アプラウス、南ドイツ新聞等各国のメディアから好評を博した。2018年にはベルリン・クラシックスよりショスタコーヴィチの弦楽四重奏を収録した2枚目のアルバムが発売されている。

2019年9月から、日本音楽財団保有のストラディヴァリウス「パガニーニ・クァルテット」を使用している。

Goldmund Quartet　Stradivarius “Paganini Quartet”

Florian Schötz	(1st Violin)	*1727 Violin “Paganini”*
Pinchas Adt	(2nd Violin)	*1680 Violin “Paganini”*
Christoph Vandory	(Viola)	*1731 Viola “Paganini”*
Raphael Paratore	(Cello)	*1736 Cello “Paganini”*

Formed in 2010, the Goldmund Quartet is now counted amongst one of the most exciting young string quartets. Educated by Günther Pichler of the Alban Berg Quartet at the Escuela Superior de Música Reina Sofia and the Artemis Quartet in Berlin, the Quartet has received important artistic impulses in masterclasses including the Hagen, Borodin and Ysaÿe quartets. The Quartet has been awarded several prizes including the Bavarian Young Artist Award and the Karl-Klinger-Prize at the 2016 ARD International Music Competition Munich, the second prize at the International Wigmore Hall String Competition and the first prize at the Melbourne International Chamber Music Competition, both in 2018. They have also been named Rising Stars 2019/20 by the European Concert Hall Organization. Recitals have taken them to prestigious chamber music venues and series across the world to Europe, Asia and North America. Following their successful debuts at Europe’s most prestigious concert halls such as Wiener Konzerthaus and Amsterdam Concertgebouw, the 2020/21 season schedule includes recitals at Philharmonie Luxembourg or Casa da Música Porto. Other highlights this season include appearances at Edinburgh International Festival, Beethovenfest Bonn and the Schleswig-Holstein Music Festival. In 2020, Berlin Classics released the Quartet’s third recording “Travel Diaries” featuring works by notable contemporary composers, to critical acclaim.

From September 2019, Goldmund Quartet is using a Stradivarius "Paganini Quartet" owned by the Nippon Music Foundation.